

パネル・ディスカッション 2003.7.2

平和運動の源流を探る

—牧口常三郎逮捕から60年

あいさつ —逮捕の日の牧口—

神 立 孝 一

どうも、皆様、こんにちは。今日は、当センターのパネル・ディスカッションにお越しいただき、大変にありがとうございます。関係者を代表し、心より御礼を申し上げます。それから、本日のパネル・ディスカッションにつきましても、牧口記念教育基金会からも後援をいただいております。この場をお借りしまして、心より御礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

このパネル・ディスカッションは、当センターでも初めての試みでございまして、本年度前期の最後の行事になります。今年は、牧口先生が逮捕されてから、ちょうど満60周年です。「満60周年」などと申しますと、何か良いことがあった記念日というようなニュアンスになり、おかしき気もいたしますが、60年に当たります。それで今朝ほども『聖教新聞』に掲載されていましたが、創立者の池田先生がさまざまな点についてスピーチをされておられます。そのなかで、「この7月6日は不惜身命、死身弘法を貫いた牧口初代会長、戸田第二代会長が日本の軍部権力によって囚われて、満60年の節である」。このお話は今日のパネル・ディスカッションにぴったりでございまして、我々もこの先生のスピーチを拝読させていただき、本日のパネル・ディスカッションを開催する意義というものを、また、さらに深く教えていただいた次第でございまして。

いつも簡単なご挨拶だけで、済ませていただいておりますが、今日はパネル・ディスカッションですので、ちょうど60年前の事実を一応、確認させていただき、それからパネラーの皆様方に色々なご発表並びに議論をしていただこうと思います。

牧口先生の逮捕というのは、今、ビデオにございましたが、昭和18年7月6日でございます。早朝、静岡県伊豆の須崎にて、下田警察署の署員によって逮捕、連行されたというのが事実です。実は、この年のほんの少し前なのですが、5月に一度、東京で牧口先生は逮捕されているんですね。逮捕というか連行されております。東京・中野署に約一週間、留置されております。この時の原因というのは、一体、何であったかと言うと、創価教育学会のメンバーによる折伏。折伏をしたメンバーが、相手の人の神札、これを焼いたんですね。そのことについて、折伏をうけた方が警察に訴えて、それに基づき、中心者である牧口先生が逮捕されるという、いわば前哨戦と言いますか、前触れみたいなものが5月の段階で起こっております。

それで、7月の2日。ちょうど60年前の今日なのですが、牧口先生は伊豆下田を訪問され、蓮台寺の中田旅館で座談会を開催されております。それで5日、6日の両日に知人宅へ行って、

その6日の朝、逮捕されるということになりました。これは皆さん、よくご存知だと思いますが、この同じ時の牧口先生のご自宅の事情というのが、今まであまり明確にされてきませんでした。つまり留守宅ですね。留守宅がどういう状況だったのか、ということが、最近少しずつ分かってまいりまして、そのことだけを今日は、簡単にお話をさせていただこうと思います。

留守宅では、牧口先生の三男、洋三さんの奥様である貞子さんがいらっしゃいました。7月6日の朝6時頃、高輪警察と、ご自宅の近くの目白警察、ここから五人の警察官が訪問しました。家宅捜査です。貞子さんに対して、まず一言目は、どう話しをしたのかと言うと、「皆、調べさせてもらいます」とのこと。この五人の警察官がいきなり自宅に上がって来た。その中で貞子さんが対応いたしました。

その時に、まず真っ先に警察の人から言われたのは、一体、何かと言うと、「あなたのお舅さんの牧口常三郎は、物凄い頑固者で、あなた、ずいぶん、苛められたんじゃないか」ということだったそうです。貞子さんは、「牧口先生は外では、相当、頑固者に見られていたんですね」なんて笑っておっしゃっていましたが、それに対して貞子さんは「いいえ、そんなこと全然、ありません。義父は本当に優しい義父で、私は可愛がっていただきました。私は、全然、そういうことはありません」とお答えになられたそうです。署員は、それに対して「ああ、そうか」と一言だけ言った、というような状況であったようです。先生が読んでおられた本、原稿などを全て箱に詰めて、リヤカーに積んで持って行った、と。これが、ちょうど逮捕された当日の、目白の牧口先生のご自宅の状況です。

そこで、夕方になってでしょうか、翌日、東京の警視庁へ来るように貞子さんは命じられます。7月7日、牧口先生は、下田から東京へ連行されるわけですが、貞子さんは、昼過ぎ、東京・警視庁に行きます。貞子さんが警視庁に着くと、「もう直ぐ来ますから、待っていて下さい」と言われ、警視庁の三階の、ちょっと広いピロティーみたいなところがあるそうなんですが、その場所で立って牧口先生を待っておられたそうです。牧口先生が到着されました。数人の警察署員と共に、その三階のピロティーに、螺旋階段をずっと登って来られた、ということです。貞子さんを見つけると、周りに何人もの警察官がたむろして、待っていたようですが、物凄く大きな声でこう言われたそうです。「何も心配することはない。信心一筋に、信心だけは怠ってはいけません」。こう言われたそうでございます。貞子さんが耳にした牧口先生の声は、これが最後であった、ということでした。

その後、逮捕されてから、目白の牧口家の近所の方々は、怖がって近寄って来ない。さすがに思想犯で逮捕されたわけでございますので、これまで少しは付き合いがあった方々も皆、離れていった。牧口先生の残されたご遺族は、皆、変な目で見られていた。「そういう記憶があるんですよ」と貞子さんは話されておられました。これが事実です。

これは単なる事実だけで、これをどう解釈するのか。また、こうした牧口先生の逮捕の事実というものを、私たちはどう捉えるべきなのか。このあたりを中心に今日は、パネラーの皆様から、さまざまな分析をいただきたいと思っております。

当センターといたしましては、こうしたさまざまな事実そのものを積み上げていくのが、一番の基本的な事柄だと思っておりますので、今後もまた、こういう事実を積み上げ、その事実に基づいたさまざまな分析、こういうパネル・ディスカッション等をこれからも開催し、研究を進めてまいりたいと思っておりますので、今後ともさまざまな形でご支援、ご協力をお願いいたします。まことに簡単ではございますが、私からのご挨拶に代えさせていただきます。本日は、大変にありがとうございました。

また、パネラーの皆様、今日はお世話になりますけれど、どうぞよろしく願いいたします。